

UDCM

Annual Report 2015

目次

1. はじめに	2
2. アーバンデザインセンターへの期待	3
3. 松山の未来を見据えて	4
4. 松山アーバンデザインセンターの歩み	6
5. 実践活動	
5-1. みんなのひろば・もぶるテラスの運営	9
5-2. 都市空間デザインマネジメント	13
5-3. 道後鉄道 120 周年記念ウォーク	15
5-4. 「漱石と子規 愚陀仏庵」まち歩きとシンポジウム	18
5-5. ラジオ音楽ドラマ「架空のまち」	20
6. まちづくりの担い手育成	22
7. 研究活動	
7-1. アーバンデザイン研究会	26
7-2. 保存修復工事の観光資源化の研究	27
7-3. 若手経営者の生業とまち再生研究会	30
7-4. 視察報告	31
8. 情報発信	35
9. おわりに	36

資料 主要な活動フィールド

発表論文

スタッフ

2015 年度取組み一覧

1. はじめに

アーバンデザインセンターが目指すもの

1. 「人が集い 笑顔広がる 幸せ実感都市 まつやま」

松山市は愛媛県の県都として、51.6万人の人口を擁する四国最大の都市である。市内には日本最古の道後温泉と築城410年を超える松山城などの歴史的施設が点在し、正岡子規をはじめとする多くの文人を輩出した国際観光文化都市である。気候は温暖で、野菜や果物、魚などの新鮮な食材に恵まれている。文化水準も高く、住みやすい街の代表と言える。

松山市のキャッチフレーズは、「人が集い 笑顔広がる 幸せ実感都市 まつやま」である。松山アーバンデザインセンター(UDCM)は、このキャッチフレーズに基づいて、松山市の中心市街地のまちづくりに取り組んでいる。

2. 「坂の上の雲」

このながい物語は、

その日本史上類のない楽道家達の物語である。

やがて彼らは日露戦争という大仕事に

無我夢中でくびをつっこんでゆく。

楽道家達、そのような時代人の体質として

前のみを見つめながらあるく。

のぼってゆく坂の上の青い天に

もし一朵の白い雲がかがやいているとすれば

それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。

「坂の上の雲」—あとがきより—

「坂の上の雲」は、司馬遼太郎の代表作の一つである。主人公は、日本騎兵の育ての親である秋山好古、日本海海戦の戦術を担当した秋山真之、俳句の革新を成し遂げた正岡子規である。この主人公3人は松山出身であり、同時代を坂の上にかがやく一朵の白い雲を見つめて生きた。このような人達が同郷であり、同時代を生きていたということは、奇跡と表現するにふさわしい。松山には、このような途方もない人物を育てる風土のようなものがある

のかもしれない。

松山市の本格的なまちづくりは、坂の上の雲のまちづくりから始まったとって過言ではない。今、それを引き継いで、JR松山駅前、市駅前から花園通り、そして銀天街から大街道、また道後温泉界限と、中心市街地の活性化を目的としたまちづくりが始まっている。

3. 松山アーバンデザインセンター(UDCM)

松山アーバンデザインセンター(UDCM)は2年前に設立された。UDCMが目指すまちづくりは、以下のようである。

- ・UDCMは市民に開かれた場で議論や活動を行い、各地域の構想や実践への支援を通じて、公・民・学の連携の下、地域主体のまちづくりの拠点としての機能を担う。
- ・まちづくりの将来像として、松山市の歴史・伝統・文化とその精神を継承し、かつ未来を志向した都市づくり「歴史と未来を融合するアジアのモデル都市」の実現を目標とする。
- ・Step1として、人づくり・拠点づくりに重点を置いた取組みとともに、松山のアイデンティティである路面電車を活用し、都市基盤整備を進める。さらに、人・拠点・地域を結び、機能を補完し、かつ相互発展しあうネットワークを構築し、次世代都市の土台作りを進める。
- ・Step2として、受け継がれる暮らしやすさや快適さが根付く風土を求めて移住する人々や、新しい文化・産業の創出をもたらす知の集積を呼び込める都市への進化と持続的発展を目指す。

UDCMが目指すまちづくりが実るときには、坂の上にかがやく一朵の白い雲を見つめて生きる多くの若者が育つことであろう。UDCMの今後の活動の成果が期待されるとともに多くの人たちが集い、ともにまちづくりを目指すことを願う。

矢田部 龍一 (松山市都市再生協議会会長)

2. アーバンデザインセンターへの期待

活動を振り返って

野志 克仁 (松山市長)

2014年11月に、公共、民間、大学が連携してまちづくりを進めるための拠点として「松山アーバンデザインセンター (UDCM)」が湊町三丁目に設置され、はや1年と数か月がたちました。

この間、UDCMの皆様には、アエル松山周辺が一番町大街道口の景観整備や道後地区の活性化基本計画の策定など、松山市が進める多くの都市整備の事業に参画していただき、専門家としての助言や関係機関との調整役を担っていただきました。また、UDCM拠点施設の隣にまちなかの憩いの空間として利用されるために整備した「みんなのひろば」にも、多くのアドバイスをいただき、深く感謝申し上げます。

「みんなのひろば」は、UDCMの皆様をはじめ、多くの関係者の皆様の御尽力のおかげで、2015年の利用者数が約57,000人にも上り、まちなかの新たなにぎわいの創出につながっていると感じています。

また、「アーバンデザインスクール」では、市民の皆さんが将来の松山のまちづくりを考え、学び、そして実践するまちづくり講座を先導され、数々のプロジェクトを実施していただきました。昨年の11月の第1期アーバンデザインスクール発表会には、私も参加させていただき、「椿の香りでおもてなしプロジェクト」や「まちなかの手づくりプールで遊ぼう」など様々なプロジェクトのプレゼンテーションを聞かせていただきました。若い方々の熱意と柔軟な発想に感激するとともに、こうしたプロジェクトが市民参加のまちづくりにつながり、自分たちのまちの誇りや愛着が生まれることは、とても素晴らしいことだと思いました。現在、第2期のアーバンデザインスクールを実施されていると伺っていますが、どういったプロジェクトが行われるのか、今から楽しみにしています。

現在、我が国は、少子高齢化、人口減少社会を迎えています。松山市も例外ではなく、現状のまま何も手を打たなければ、100

年後の松山市の人口は今の52万人から16万人になってしまうと予想されています。

こうした中では、松山市全体が一体になって、知恵を絞り、工夫を凝らして、まちづくりを進めていかなければなりません。そのためには、市民の皆さんにまちづくりの主役になっていただくことが必要です。

松山市としても、「人が集い 笑顔広がる 幸せ実感都市 まつやま」を目指して、精一杯努力をしていきますので、皆様には一層のお力添えをお願いいたします。これからも、公共、民間、大学の連携によるまちづくりのつなぎ役として、UDCMがますます発展されることを期待しています。



野志克仁 松山市長

3. 松山の未来を見据えて

UDCMの役割

羽藤 英二（センター長）

1. はじめに

松山アーバンデザインセンターは2014年に設立されて以来さまざまな取り組みを行う中で、ようやくその組織としての役割や輪郭が見え始めている。都市デザインやまちづくりを行う他の組織や団体と一体何が違うのだろうか。松山アーバンデザインセンターは3つのポイントで特徴付けられていると言える。

まず一つ目の特徴は、「公民学の連携」である。行政、民間、大学の三者が連携して都市のことを考えるセンターは意外に少ない。三者の連携によってアーバンデザインスクールのような学びの場をつくり、そこで人が育ち、人と人との関係が生まれ、まちづくりが有機的に生まれてくる。このような実際にまちづくりを動かす「プログラム」を設計することを目指している。

二つ目は、「社会実験」による「段階的な都市空間整備」の推進である。将来像を描ききって計画し、設計施工していく従来のプロセスではなく、ひとまず社会実験で試してみて、市民の意見を聞いて、そこで案を修正していく。こういう段階的な都市空間整備を考え、実践していくのが松山アーバンデザインセンターの役割でもある。

三つ目の特徴は、「専門家集団」の協働による「質の高い都市デザイン」の実現である。デザイン的に目を引く著名な建築家による建物もちろん重要ですが、その一方で市民の方々はどんな場所が欲しいのか、どんなデザインが欲しいのか、そういった市民の声とデザインの専門家の声を掛け合わせることで今までになような空間を作っていくことが重要であり、これが松山アーバンデザインセンターの三つ目のポイントである。

2. これまでの取り組みと今後の展開

松山は豊かで温暖な気候に支えられているが、少子高齢化に伴う経済の衰退、社会保障の問題など社会的課題を抱えている。松

山アーバンデザインセンターは、こういった社会的課題に対して社会実験を通じてまちの風景を変えようといった仕事を行ってきた。これまでの取り組みを振り返りながら、松山の未来を見据えて今後の展開を示してみたい。

（1）まちなかの再生に向けたアーバンデザイン

松山アーバンデザインセンターがまず手がけたことはまちなかに「みんなのひろば」をつくることであった。コインパーキングのアスファルトをひっぺがして小さな丘と土管を設置し、古い井戸から水を引いて泉を作ったら、子どもたちが集まってきて遊ぶようになり、まちなかの風景は劇的に変わった。私たちはこの広場を「みんなのひろば」と名づけたが、「この場所は自分がないと成り立たない。自分が一番楽しみ方を知っている。だから友達と一緒に行って楽しみたい」というように「わたしたちのひろば」から「わたしのひろば」になっていく。休日に家族で郊外のショッピングセンターに出かけることも多くなっているが、まちなかにお金がなくても過ごせる場所、居場所があると、子どもたちが集まってきて、ここに住もうかなということにもなるのではないと思う。まちや居住空間が経済的な原理だけで回ってしまっていてゆとりがなくなっている今、まちなかに「わたし」の空間を作ることはまちを人の手に戻すという意味でも重要なことであろう。まちなかの再生に向けたアーバンデザインを手がけていくことは今後も松山アーバンデザインセンターの大きな役割になる。

（2）経済的合理性を踏まえた文化的風景の再生手法

また、まちのデザインの質を高めるために、多くの現場でデザインのマネジメントに関わってきた。例えば、今ちょうど道後温泉本館が耐震改修に入る関係で、行政や地元の方々と一緒にどういう空間づくりをしたらいいのかを考えている。これは単なる空間のデザインではなくて、まちの付加価値を高めるということ

あり、不動産価値を高めるといことはそれが税収になってまちに返ってきて、その税収によって子育て支援など市民への福祉サービスにつながる、といった循環が生まれるとことを意味している。また、道後温泉は漱石や子規によってたくさんの句が読まれているが、漱石と子規がいた文化的な風景をどうやって読み解き、伝えていくのか、さらには歴史を読み解くこともアーバンデザインセンターの重要な仕事である。このように経済的合理性を踏まえた歴史的文化的風景の再生手法を考えていくことも松山アーバンデザインセンターの役割である。

(3) 子育て支援とアーバンデザイン

少子高齢化が進む中で、都市整備の観点からも子育て支援を進めていく必要がある。財源が限られ、補助金の期待ができない中で、自分たちの手でまちなかに身近な居住空間を作り、自分たちの暮らしをよくしていく。子どもたちが自由に遊び、学び、それを大人たちが優しく見守る。また、子育て世代が安心安全な環境で暮らしを営んでいく。そういう体験を作っていくことも松山アーバンデザインセンターの大きな仕事になってくるだろう。

3. 松山のまちづくりの結び目として

このように松山の社会的課題に対して、子育て支援と公共空間を掛け合わせて考える、いかに文化を継承しながら経済的な活力につなげていくのか、まちづくりの思いをどうやって育てていくのか、こういったことが松山アーバンデザインセンターの今後の課題としてあると思われる。行政がしっかりやるべき仕事、専門家がやるべきこと、またそこに市民が加わってやるべきこと、個々がそれぞれやればいいのではなく、これを有機的にどう作用させていくのか、それこそがまちづくりの結び目としての松山アーバンデザインセンターの重要な仕事ではないかと思われる。

4. 松山アーバンデザインセンターの歩み

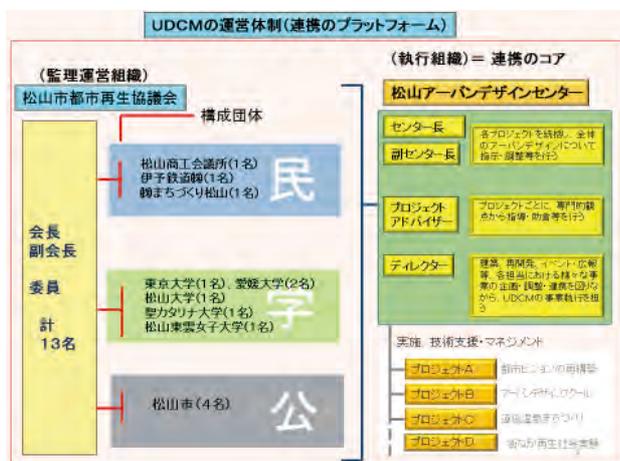
松本 啓治 (シニアディレクター)

1. はじめに

街の課題は少子高齢化の進展、人口減少社会の到来、環境問題や経済のグローバル化などにより、ますます深刻の度を深めている。その解決策も一様ではなく、複雑化・複合化し、行政だけでは簡単に解決できないことが多くなってきた。

都市空間のデザインについては、行政やコンサルタント、デザイナー、店舗、企業、市民が連携して取り組むことで高質な都市空間を創出している街も多い。しかし、現場では立場や個人の考え方の違いもあり、意思決定は容易ではない。そこで専門的知識を活かし関係主体間の調整を図り高質な空間を生み出す機関として「アーバンデザインセンター」の設立がみられるようになってきている。

そこで柏の葉アーバンデザインセンターなどに関わってきた東京大学羽藤英二教授の提言を受け、商工会議所会頭や伊予鉄道(株)、まちづくり松山、松山4大学、行政で組織する都市再生協議会を設立し、その執行機関として松山アーバンデザインセンター(以下、UDCM)を位置づけ、愛媛大学内にアーバンデザイン研究部門を設置した。



2. 活動拠点の開設

UDCMの活動拠点は、市街地再開発事業に向けて動き出そうとしているL字地区に設置された。高島屋と三越を核としてモールで結ぶ2核1モールの中心部であり、松山南部からの交通を受け止めるゲートウェイである。都市計画マスタープランにも位置付けられ、過去何度となく再開発に向けた議論が交わされてきた。UDCMが設置されたのはそのような一角の商業ビル2階にある。道路を挟んだ前面にはコインパーキングだった低未利用地を、子供たちの遊びの場や学生の語りの場、大人たちのくつろぎの場として社会実験が行われている。

「みんなのひろば」と命名されたのは、計画段階から市民参加のワークショップ(約50人)によって場所の設定から機能・運営方法まで、みんなの意見によって出来上がったことによる。ドラスエモンの世界を彷彿させる土管と芝生と手押しポンプの広場が想定外の人気を見せている。



3. UDCMの役割

UDCMの機能は①交わる②知る③創る④学ぶ、の4つを基本コンセプトとしている。

「混ぜる」という意味の伊予弁「もぶる」と命名されたもぶるテラス(約50㎡)と「みんなのひろば」(約360㎡)は、子供たちや女生徒の憩いの空間となっていて、様々な世代の交流の場である。

もぶるテラスでは、中心部の模型が置かれていて街をミニスケールで俯瞰することができ、そこで行われている再整備事業など松山市の取り組みも知ることができる。まちづくりの図書も設置されていて、まちづくりの情報を知る手がかりとして大切な場所である。

UDCMのコア事業であり、最も特徴的な取り組みは、もぶるテラスで開校されている大学生や社会人が学ぶアーバンデザインスクールである。目的はまちの担い手育成。このスクールの特徴は座学だけでなく、実践していくことにある。企画をカタチにしていくプロセスを学び、街の人たちと一緒に創り上げていく。そこで得られる知見や体験、交流は学生生活では味わえないドラマがある。

評価の高かったイベントに土のうプールがある。大変な労力のある作業で、山から土を入れた土のうを600個広場に持ち込み環状に積み上げ、水を貯め一夜にして街中にプールを出現させた。子供たちの笑顔が学生たちの疲れを吹き飛ばした。

さらに、初年度に行った風景づくり夏の学校2014では、30歳以下の学生・社会人を対象に道後温泉の活性化策について都市計画設計競技（コンペ）を開催して好評を得た。東京大学、早稲田大学、京都大学、名古屋大学、愛媛大学などが参加したスキルの高い提案は、審査員の内藤廣先生や後藤晴彦先生、青木淳先生、羽藤英二先生たちを唸らせ、新しい学生提案のスタイルとなった。



4. 行政との関係

UDCMを立ち上げたねらいとして、松山市の都市空間デザインマネジメントがある。道後温泉活性化を筆頭に一番町交差点の景



観整備、花園町通り空間改変、JR松山駅立体交差・土地区画整理、L字地区再開発などの事業がある。こうした空間をいかに魅力的な空間に仕上げていくか、松山市とUDCMの実力が試されている。

写真は評価の高い一番町大街道口の景観整備である。UDCMが民間団体とコンサルタント、行政の間に入り、景観及び空間設計の技術支援を行った。ネットでは「おしゃれ」と好評で否定的な意見はない。

都市空間のデザインマネジメントを学ぶ場としてアーバンデザイン研究会やフォーラムがある。UDCMセンター長・羽藤英二東京大学教授やディレクターの人的ネットワークを活用して、これまでも青木淳建築計画事務所青木淳氏、関西大学江川直樹氏、京都大学川崎雅史氏などに講演をいただいた。また、現在、道後温泉・椿の湯・新湯の建設に協力いただいている東京大学名誉教授内藤廣氏によるフォーラムも開催した。

現在、アーバンデザインセンターの設立は全国に広がりを見せ、この組織間が協力し、研究会やフォーラムを開催することで、それぞれの都市の魅力を高めていくことが可能となった。

5. 歴史の再評価

まちづくりを考えるうえで着目しなければならないことの1つに「まちの歴史」の評価がある。「まちには歴史の記憶がある」

と言われるのは、坂の上の雲ミュージアム館長の松原正毅氏である。長い歴史の積み重ねを、高い視座をもって都市計画に反映させることは、市民に対する責務であろう。そうすることでまちへの愛着や誇りを醸成することができる。

去年は夏目漱石松山中学校赴任120年であった。正岡子規が日清戦争従軍で体調を悪化させ帰国し須磨での休養を経て松山に帰省、二番町にあった漱石の下宿宿愚陀仏庵で52日間の共同生活を送ったことはよく知られている。

この共同生活は日本文学にも大きな影響を与えたが、のちに小説『坊ちゃん』を生むきっかけになった。『坊ちゃん』を通して正岡子規のふるさと松山を偲び子規に思いを馳せていたのかもしれない。この機会に今一度『坂の上の雲』のまちづくりの重要性を再認識してもらいたいと思っている。

6. おわりに

UDCMは歴史の再評価や都市空間デザインマネジメント、人材育成、交流促進、にぎわい創出など多くの事業を展開している。最も根幹となる事業は都市ビジョンの再構築である。都市の未来について市民団体・企業等と繰り返し議論を深め、市民視点に立った松山の目指す方向性を指し示す必要がある。

まちの方向性を共有し、具体的な活動を起こすことができればUDCMの存在意義が高まるに違いない。そうした活動を通して、まちを愛し誇りに思う市民を増やしていくことができると思う。松山はとてよいまちだ。この松山を笑顔あふれるまちにしていくなことがUDCMの努めである。

5. 実践活動

5-1. みんなのひろば・もぶるテラスの運営

石飛 直彦 (客員研究員)

1. はじめに

「魅力的なまちのデザインや賑わい再生等に繋げていくための拠点」という位置づけのもとで開設された「みんなのひろば」（以下、ひろばという。）と多目的スペース「もぶるテラス」（以下、テラスという。）が2014年11月の社会実験開始から約1年半を迎えた。

開設当初、道行く人が、コインパーキングがひろばに変わり、空き店舗がテラスに変わっている光景を目にして驚きの声をあげていたものが、今や、子供たちがひろばで駆け回り、家族連れが憩い、テラスでは若者が談笑し、また様々な会議や活動が行われている様子は、まちなかの日常としてすっかり溶け込んでいる。一方で、時間の経過とともに、いくつかの課題も明らかになってきている。ひろばとテラスの運営・管理に携わってきた立場から、この1年半を振り返る。

2. 幅広い世代の利用者

開設当初、何のための、何をやる場なのか分からず、利用に躊躇する場面が度々見られたが、その後、利用者は着実に増加し、実験開始から2016年2月末までの期間における来場者は、ひろば

で延べ約6万3千人、テラスでは延べ約2万5千人となっている。特に、夏季には夜市などの地域イベントと連動して利用時間帯を延長したこともあって、ひろばでは延べ1,000人/日を上回る日もあり、テラスでも多くの人で溢れかえるなど賑わいを見せた。日常においても、子供からお年寄りまで幅広い世代が訪れ、利用が定着してきている。

テラスの一般利用者は、トイレや休憩目的が大部分を占めているが、図書館の機能を備えた「まちライブラリー」が2016年1月から開始されたこともあり、図書閲覧を目的とした社会人の来場も増加しつつある。

3. 多種多様なプログラムの実施

休憩や雑談、飲食など日常的な利用に加えて、社会実験事務局や各種団体等により、2016年2月までに、ひろばでは36件、テラスでは271件の大小様々な催し物や会議などが開催され、賑わい創出の一助となっている。

事務局が主体となった季節イベントや音楽会、DIY、交流会などに加えて、商店街と連携したイベント、大学や専門学校、各種団体によるワークショップ・勉強会など、多種多様なプログラムが行われている。

なかでも、松山アーバンデザインセンターが主催している「アーバンデザインスクール」の活動の一環として実施された「土囊



写真-1 左：整備前（コインパーキング） 右：整備後（ひろば）



写真-2 左：整備前（空き店舗） 右：整備後（もぶるテラス）



写真-3 土囊プール

プール」はマスコミでも取り上げられるなどインパクトのあるプログラムであった。大量の土嚢を敷き詰めてひろば内に造り上げられたまちなかのプールは、3日間限定であったものの、連日、子供たちの喜ぶ声が響き、利用者から翌年の実施も切望されるなど盛況を博したものとなった。

また、ひろば内の一角に設置したプランターや土嚢袋で野菜を育てる「ひろばのはたけ」という取り組みも、小規模ではあるものの、まちなかにおける今後の公共空間活用等を考えさせられる取り組みであった。現地管理者の一員である学生スタッフが企画し、周辺にお住まいの方約20人と学生スタッフとで、育てる野菜の選定から育て方の勉強、当番制での水遣り、収穫及び収穫物の試食という一連の作業を通じて、参加者同士、学生と参加者のコミュニティが形成された。参加者の満足度も高く、“学生”が主体的に取り組んでいることに対する評価も高いものであった。

これら2つのプログラムは、イベントを主軸とした賑わい創出、回遊性向上という側面だけではなく、松山市が掲げる「集約型のまちづくり」を進めていく上で、庭を確保することが容易でない都心居住、常設の大型施設などをまちなかに多数整備することができない実状、コミュニティが希薄な都心での高齢者の独り暮らしや子育て問題など、多くの課題に対して、公共空間の創出・活用、コミュニティ形成のあり方・方策を考えていくにあたっての良い事例であるように思われる。

また、これら各種イベント開催のほか、夜市等の大規模イベント開催に伴う道路の通行規制に合わせて道路占用を行い、道路上にテーブルやイスを設置してひろばと一体となって活用することも試行された。ひろばとテラスを分断し、商店街内も信号制御さ



写真-4

左上・右上：ひろばのはたけ
左下：通行規制時の道路占用

れることなく横断する道路には、荷捌き車両や周辺居住者の車両以外に、当地域に用の無い多くの通過車両が通行しており、開設当初から子どもの飛び出しによる事故の発生が懸念されている。

これまでのところ幸いにも事故やトラブルは発生していないものの、賑わいや憩いを創出する場の横で多くの車両が通行することは、「歩いて暮らせる」を標榜するまちとして、決して良好な環境とは言えない。ひろばやテラスという公共空間だけではなく、それに接続する歩行空間も合わせた「拠点」と「ネットワーク」のあり方・デザインを考えていく良い機会であると思われる。

4. 「学（学生）」の関わり

前述のとおり、本取り組みにおいては、現地での日常的な案内・管理からイベントの企画や運営など、様々な面で学生が深く関わっていることが特徴的である。このことが、公・民・学連携のまちづくりにおける「学」の関わりの一部の「見える化」を果たしている。授業や試験、学内活動など本業を持ちつつのスタッフ活動は、安定性の面では問題もあり、また学生の負担も大きい。しかし、「学」の関わりは、スタッフが入れ替わりつつも継続的な関与が期待されることから、その仕組み化が課題の一つとなっている。

5. 取り組みの効果

ひろばとテラスの認知度は、徐々に高まっているほか、周辺住民や店舗においても、設置の目的や活動に対する理解も高まりつつある（図-1）。

利用者の満足度は、開設当初より高いものであったが、この1年半余り高い満足度を維持している（図-2）。

また、回遊性に関しては、自家用車で来街し、松山市駅周辺や大街道口周辺の駐車場に停めた人が、ひろばやテラスに立ち寄っていることも確認されているが（図-3、図-4）、一方で、未だ元のコインパーキングの方が良かったという意見があるほか、外出頻度や滞在時間などの行動変化に大きな影響を及ぼすまでには至っていない。今後、公共空間のあり方・役割・目標について議論を進めていく必要がある。

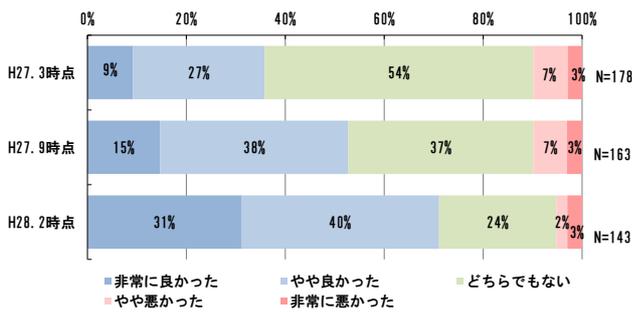


図-1 ひろば・テラスの評価 (周辺店舗アンケート結果)

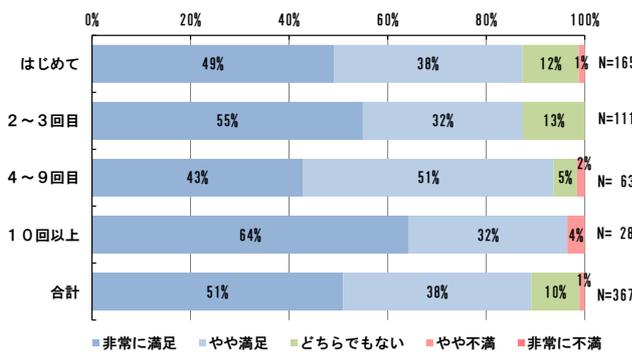


図-2 ひろばの満足度 (利用者アンケート結果)



図-3 駐車・駐輪場所エリア区分



図-4 来訪者の駐車・駐輪場所

6. 今後の課題

実験開始からの約1年半、多くの市民・関係者の関わりの中で、一定の成果は発現されているものの、一方で、いくつかの課題も残っている。

課題1：「まちづくりの拠点」機能の充実

特に、テラスについては、回遊促進のための休憩、トイレなどの機能、賑わい創出のための各種イベント開催等の場であるとともに、まちづくりの拠点（プラットフォーム）として、情報発信の拠点としての機能が重要な役割の一つである。

松山市中心部での都市整備プロジェクトの紹介や模型の設置、バリアフリーマップ、自転車駐輪場、各種まちづくり関連の案内チラシ・図書の設置、これまでのまちの成り立ちを紹介する昔の写真・地図の展示などの取り組みのほか、アーバンデザインスクールやワークショップの場としての活用もなされている。しかし、まちづくりの拠点としての機能発揮は十分ではなく、またテラスの本来のあり方についての議論・共有化も不足していたことは、運営に携わった立場として反省すべき点である。

課題2：「民」の関わり拡大

公共空間であるひろば、テラスでの活動においては、公益性の確保が必要であり、営利活動は原則禁止となっている。一方で、「公・民・学」連携の「民」、特に民間企業や商業店舗においては利益確保が基本であることから、これまでの関わりは希薄なものになっている。

ひろば・テラスの公益性と民間関与については、松山市とアーバンデザインセンター、地元の町内会・商店街組合の代表者、運営・管理委託者等で構成される運営委員会の場においても論点の一つになっていることから、引き続き議論を行い、「民」の関与の拡大を図っていく必要がある。

課題3：イベントに過度に依らない賑わい創出

事務局が主催となって数多くのイベントを実施してきたが、イベントによる賑わい創出は一時的なものであり、イベントが無ければ人が来なくなるというリスクも有している。イベント実施には多大な労力と費用が必要であることから、市民や民間主導で如何に日常的・持続的に利用してもらうかが課題である。

課題4：維持・管理の仕組みづくり

ひろばとテラスは社会実験として行われていることから、運営・管理等に要する費用は松山市の委託費で賄われている。本取り組みを持続的なものにしていくためには、運営や維持・管理への市民協力や企業等の民間活力が必要不可欠であり、公金に過度に依らない仕組みづくりが必要である。

課題5：アーバンデザインへの展開

ひろばの具体的な設えは、整備前に開催された市民参加のワークショップでの意見等を踏まえながら決定されている。芝生が敷き詰められたひろばに、土管やミニ噴水、手押しポンプの設置など、良質な空間が造られたが、どのような空間が利用者にとって快適なのか、立ち寄りやすいのか、滞留しやすいのかといった空間の評価を行うまでには至っていない。

また、前述のとおり、ひろばとテラスの間には多くの車両が通行し、安全性の面での問題は残っている。

さらに、ひろば近傍には駐輪場が設置されているものの、周辺には放置自転車が溢れている。

滞在しやすいひろば空間とは？、訪れやすい・回遊しやすい道路空間・景観形成とは？など、都市デザイン、アーバンデザインへの展開を図っていくことが必要だと思われる。

7. おわりに

2014年11月から開始された社会実験は、当初2016年2月末までの16ヶ月間の予定で進められてきたが、認知度や周辺住民・店舗の理解も徐々に高まり、また、利用者からも継続実施を求める声が多数あったこと等から、少なくとも1年間の延長が決定されたところである。

今後、各種プログラムの実施やPR活動の拡大等により、多くの市民の来場が期待されるものの、前述のとおり、解決すべき課題は多い。

筆者は、2016年2月末をもって運営・管理の立場からは離れることとなったが、今後も専門家の一人として積極的に関わり、本取り組みがより発展していけるよう、関係者との活発な議論を引き続き図っていきたい。

共同研究者

復建調査設計株式会社 平井健二

5-2. 都市空間デザインマネジメント

一番町大街道口、花園町通り、銀天街L字地区

曲田 清維（副センター長）・片岡 由香（ディレクター）

1. はじめに

UDCMは、地域に密着したまちづくりの専門機関として、松山の地域特性を活かした良質な都市空間の形成に向け、市民・行政・民間事業者等の協働・連携を主導している。特に、松山市の事業については、UDCMスタッフが都市再生協議会専門部会や関係審議会等に参加しつつ、都市デザイン等に係る助言等を行い、優れた都市空間形成に向けた取り組みを支援している。

2. 一番町大街道口

26年度に地元関係者などで構成される専門部会や松山市、コンサルタント、UDCMからはプロジェクトアドバイザーの千代田教授、新階副センター長、片岡が参加し、対象エリアのデザインの方針について協議・検討を重ね、大街道商店街の一番町口のゲート部分のファサードデザインや、路面デザイン、シンボルツリー、ストリートファニチャーなどデザインを決定した。隣接する商業ビル「アエル松山」のオープン(2016年8月26日)に合わせる形で竣工した。



図 一番町大街道口

3. 花園町通り及び松山市駅前広場の公共空間活用などに関するワークショップ運営

今年度は、26年度の検討に引き続き、沿道の地権者が行ったファサードのガイドラインの策定や実施設計について助言を行った。

松山市駅前空間改変事業について、松山市から委託を受け、ワークショップを開催している。第1回(10月21日)は交通工学が専門でUDCMアドバイザーの愛媛大学松村教授に講演いただき、魅力的な駅前空間について勉強会および意見交換を実施した。また、第2回(2016年2月5日)は合意形成や公共ガバナンスが専門でUDCM副センター長の愛媛大学羽鳥准教授に、シビックプライドについて講演いただいた。講演後には参加者全員でワークショップを行い、意見交換・問題意識の共有化などを行った。今後も勉強会やワークショップ等による意見交換を継続し、将来的な駅前空間のあり方など地権者や事業者の意見聴取を行いつつ、検討を進める。

花園町通りにおいても同様に、魅力的な歩道空間の活用・管理の在り方やデザインについて、ワークショップを開催(これまでに3回実施)し、全体のデザイン案とのすり合わせを行い、次年度にはデザイン案を決定すべく、結果を取りまとめる。

具体的には、以下のスケジュールで地元関係者と一般市民、学識経験者、UDCMを構成員としたワークショップを開き、デザイン検討に向けて協議を進めた。

- ・第1回ワークショップ(7月25日)：イベント利用の可能性/駐輪・自転車の使い方/維持管理など
- ・第2回ワークショップ(8月30日)：講師から正岡子規についてのレクチャー/植栽に関する議論など
- ・第3回ワークショップ(10月10日)：デザイナーや講師からのレクチャー/デザイン面の議論など



図 花園町通り

4. L字地区周辺再開発（銀天街L字地区再開発検討専門部会）

銀天街L字地区は、平成25年3月策定の「中心地区市街地総合再生基本計画」で、一番町交差点周辺、松山市駅周辺と並ぶ拠点空間と位置付けられている。L字地区では、再開発を中心とした建物更新により、魅力ある商業核と、来訪者を受け止める集約型駐車場や広場などの機能を一体的に創出するほか、都心居住機能の導入も合わせて進めるまちづくりが検討されている。

26年度は地元における研究会での具体的戦略案として、①玄関（ゲート）機能の発揮 ②接続点（コネクター）機能の構築 ③個性を持った一つの要素の確立、が打ち出され、合意形成が図られた。また、27年5月に、それまでの「銀天街L字地区再開発計画研究会」を発展させた「松山銀天街L字地区再開発全体協議会」が発足し、再開発に向けた機運が高まっている。

今年度は、松山市都市再生協議会の下に、「銀天街L字地区再開発検討専門部会」を立ち上げ、検討が開始された。第1回目（平成27年11月12日）は、これまでの経緯、及び人口動態等データによる地区の現状が紹介された。第2回目（平成28年2月4日）は、地権者（地元住民）及び一般市民に対するアンケート調査を元に議論されるとともに、各地の再開発事例が紹介された。地元住民の居住地としての評価は高く、再整備への関心は高い。一般市民はL字地区へのアクセスや回遊時のアメニティの充実の要望が高い。またL字地区のキーワードとして「暮らし(居住)と賑わい(商業)の共生」「表(アーケード)と裏(路地裏)」の共生「各拠点(松山市中心部)との共生」が示された。今後は施設需要や都市機能

の配置検討、資金計画などの検討を行い、平成28年度半ばの基本計画の策定を目指している。



図 銀天街L字地区ブロック

5-3. 道後鉄道 120 周年記念ウォーク

日本初のリゾート鉄道

松本 啓治 (シニアディレクター)

1. はじめに

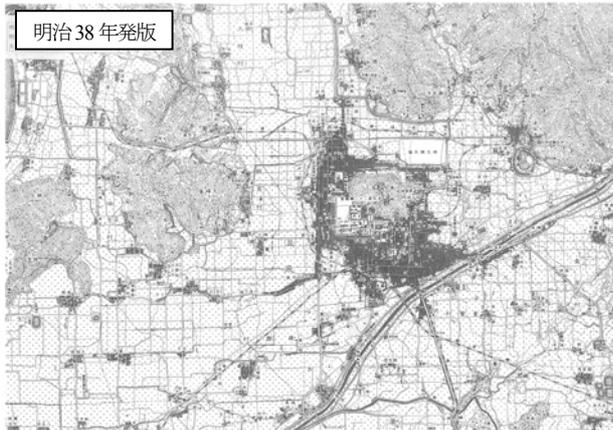
正岡子規の友人夏目漱石が英語教師として松山中学校に赴任してきたのは、明治28年4月のことである。一方、正岡子規は、4月、従軍記者として清国に従軍し、結核を悪化させ8月帰国することとなる。須磨療養所を経てふるさと松山の地を踏んだのは8月末である。漱石の勧めで愚陀仏庵に転がり込み52日間の共同生活が始まるのだが、このことはのちに漱石が文学者としての道を歩むきっかけとなった。

道後湯之町初代町長伊佐庭如矢が道後温泉本館を改築し、入浴客の足として道後鉄道を明治28年8月22日開通させた。

子規遺稿『散策集』によれば10月6日、漱石と連れ立って道後温泉本館から鷺谷、宝厳寺まで吟行し「色里や十歩はなれて秋の風」「稲の穂に温泉の町低し二百軒」などの句を詠み、帰途大街



明治38年発版



道新栄座で照葉狂言を観劇している。

二人が乗ったであろう道後鉄道の軌跡を訪ね、二人の交友を偲ぶと共に120年前のまちの風景を楽しんでもらおうという企画である。

2. 第一弾 道後鉄道120周年記念ウォーク

道後鉄道は、現一番町（アエル松山）から勝山町電停を通り、愛媛銀行本店から南持田町、北持田町、昭和町、道後一万、道後町2丁目、道後町1丁目を経由して道後温泉駅まで敷設され、さらに古町に結ばれていた。南・北持田町には、ゆるやかにカーブする道後鉄道跡が松山市道として現存している。



この道後鉄道の乗客数は年間利用者数30万人を越えて順調だったようであるが、明治33年伊予鉄道と合併している。

その後伊予鉄道は、明治44年発足した松山電気軌道と熾烈な乗客獲得合戦を繰り広げていく。

上一万で伊予鉄道と松山電気軌道が立体交差していた写真が残っている。



一万藤原町道

また、愛媛県民文化会館北側にも軌道幅762mmの道後鉄道跡が細い路地として残っている。



実施日	平成28年8月22日（道後鉄道開通日）
共催	愛媛大学防災情報研究センター 松山アーバンデザインセンター お城下まつやま
後援	松山市、まちづくり松山、伊予鉄道 愛媛新聞、南海放送、テレビ愛媛、あい テレビ、愛媛朝日放送
参加者	60名

【アンケート結果】

- 1 男女半々で60歳代以上が48%で、次いで40～60歳が26%、ほとんどが松山市民である。
- 2 情報は広報紙からが50%、チラシ、その他が残りである。

【意見】

- 道後鉄道に絞ったウォークでいろいろ新しいことも知ることができた。松山の歴史を知ることができてよかった。
- 市内に住んでいても知らないことが多く、とても有意義でした。
- よき明治時代の回顧は素晴らしいので次回の企画を楽しみにしています。
- とても面白く参加させていただきありがとうございました。丁寧で判りやすい説明ありがとうございました。自分の住んでいる街の歴史に少しですが興味を持つことができ、これから同じ場所を通ることがあっても、新たな気持ちで通ることができます。
- 鉄道の歴史と現在の地理が結びついた。
- 松山に来て8年、古い松山の土地の変化がとてもよくわかりました。説明も詳しく大変勉強になりました。

3. 第二弾 道後鉄道120周年記念ウォーク

道後温泉駅～木屋町～萱町六丁目駅（旧三津口駅）

第一弾が好評であったので、これまであまり歩かれていない城北コースを企画した。

伊佐庭如矢湯之町町長は三津の住民と海を渡ってくる客のために、既に開通していた伊予鉄高浜線の古町駅に連絡して道後まで汽車を走らせた。



実施日	平成28年1月16日（土） 10：00スタート
共催	愛媛大学防災情報研究センター、松山アーバンデザインセンター
後援	松山市、まちづくり松山、伊予鉄道
参加者	68名
コース	道後温泉駅から城北練兵場東北端を通り、樋又稲荷神社から県道六軒屋石手線を通り、高砂3丁目の不諭院（通称田中観音）から終点萱町六丁目（旧三津口駅）までの約4km。



【アンケート結果】

- 1 ほぼ男女半々で60歳以上73%
- 2 情報は広報紙が50%、ちらしが22%

【意見】

○樋又にて愛らしいお地蔵様が見れて良かった。トイレも考慮に入れて置いてください。

○各所で詳しい説明があり、良い勉強になりました。次回のイベントもよろしく。スタッフの皆様お疲れ様でした。

○道後今市付近に斜めになった道路があったので、その理由がわかった。一般の通行の邪魔にならないように。

○新しい発見がいくつもあってよかった。またところどころはゆっくり歩いて、訪ねたいと思った。通して歩く機会がなかったのが良かった。解散場所がわかるようにしてほしい。

4. おわりに

街の歴史に触れる機会は少ない。こういう機会にまちの歴史を知り、シビックプライドを醸成していければと思っている。街を知ることは、まちづくりの原点である。

来年の子規漱石生誕150年に向けて小さなことではあるが、少しでも盛り上げていきたい。

5-4. 「漱石と子規 愚陀仏庵」まち歩きとシンポジウム

松本 啓治 (シニアディレクター)

1. はじめに

5-3で述べたとおり、明治28年4月、夏目漱石は松山中学校の英語教師として赴任してきた。松山での生活はわずか1年だったが、愚陀仏庵での正岡子規との共同生活をきっかけに句作にふけるようになり、この1年の松山体験をもとに高浜虚子が主宰するホトトギスに『坊っちゃん』を著した。

この漱石赴任120年を記念して、愛媛新聞社と共催で「漱石が見た『坊っちゃん』のまち探訪」及びシンポジウム「漱石にとっての松山」を開催した。

2. 漱石が見た『坊っちゃん』のまち探訪



(2) 漱石が見た『坊っちゃん』のまち探訪

日 時 平成27年11月7日 (土) 13:00~16:30

集合場所 堀の内公園・東屋集合

コース 城山公園～松山中学校跡～愛松亭跡～愚陀仏庵跡
～

新栄座跡～秋山兄弟生家～松山東高(明教館)～
道後温泉駅～子規博句碑～放生園(からくり時計・
子規像) 道後温泉本館～宝厳寺(句碑)～ふなや

募集人員 定員 66名

(1) バス漱石探訪

日 時 平成27年11月6日 (金)

探訪先 11/6 松山空港～ターナー島～三津の渡し・三津
浜～円満寺(日浦)

11/7 東温市・一畳庵～唐岬の滝～明教館(松山
東高校)～道後～ふなや

参加 42名



松山東高・明教館



3. シンポジウム「漱石にとっての松山」

基調講演

- 日 時 平成27年11月8日(日) 9:30~12:30
- 場 所 子規記念博物館
- 参加者 250名
- 主催 松山坊っちゃん会、松山子規会、愛媛大学防
災情報研究センター、愛媛新聞
- 共催 松山アーバンデザインセンター、愛媛CATV
- 後援 愛媛県、愛媛県教育委員会、松山市、松山市
教育委員会、新宿区、熊本県、夏目漱石記念
年実行委員会、鎌倉漱石の会、くまもと漱石
倶楽部、京都漱石の会、草枕ファン倶楽部、
和歌山漱石の会、修善寺漱石の会、長野漱石
会、木曜会、子規新報、船団松山、お城下松
山、まちづくり松山、NHK放送局、南海放送、
テレビ愛媛、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、
FM愛媛

内 容

- 第1部 基調講演「俳人漱石の誕生」
講 師 坪内稔典氏
- 第2部 パネルディスカッション
- コーディネーター 三浦 和尚氏 (愛媛大学教育学部)
- パネリスト 武内 哲志氏 (松山坊っちゃん会)
今村 威氏 (松山子規会副会長)
松根 敦子氏 (漱石門下・松根東洋城
のめい)



4. おわりに

鎌倉漱石の会、くまもと漱石倶楽部、和歌山漱石の会、長野漱石会、木曜会など全国から多くの関係者が来訪するなかで松山坊っちゃん会、松山子規会、松山観光ボランティアガイドの会、子規新報、松山アーバンデザインセンターが主体となって、まち歩きやシンポジウムを開催した。

子規・漱石に関わりのある250名の方々が参加して交流を深めたことで、2017年の子規漱石生誕150年に向け、意義ある取り組みとなった。

5-5. ラジオ音楽ドラマ「架空のまち」

～子規、漱石の青春番地～

松本 啓治 (シニアディレクター)

1. はじめに

松山アーバンデザインセンターは公民学が連携するまちづくりの拠点であり、その拠点が効果的に機能していくためには、様々な活動や街中情報を発信し、ブレンドする循環装置が必要であることから、FM愛媛の協力を得て、「まち@ラジ」を立ち上げた。

おりしも昨年は「漱石松山赴任120年」であり、本年は「漱石没後100年」、来年は子規・漱石生誕150年であることから、漱石の『坊っちゃん』にちなんだラジオ音楽ドラマ「架空のまち～子規、漱石の青春番地～」を制作することとした。明治という時代に高い志を掲げ、果敢に時代に挑戦していった子規・漱石たち精神を受け継ぎ、魅力ある松山を次世代に残していくためにまちづくりに奮闘するラジオ音楽ドラマである。

2. 声優ワークショップの開催

12月12日、参加者が心を合わせて、1つのラジオ音楽ドラマを創り上げるというワークショップを開始した。

声優に興味のあった人や人前で話すことが苦手な人、職場で活用ができれば良いと思った人、言葉のコミュニケーションを取りたいという人、自分の発見と挑戦という人など、様々な想いをもちこのワークショップに参加している。



参加者が多かったこともあり、講演形式をとることも考えられたが声優・森一馬氏がマンツーマンにこだわり、一人ひとりに直接レッスンを行なった。生徒の緊張をほぐし、楽しく自然な形で力を引き出そうとするレッスンは実に効果的で、アンケート結果がそれを証明している。

3. 収録に向けて

1月23日から1話ごとの練習をおこない、30、31日に収録をおこなった。全員で行なった効果音やタイトルコール、女子高生のおしゃべり、店内のがやがや風景などは、みんなで楽しく一体となって収録が行なわれ感動的だった。



FM愛媛で
あなたも
声優デビューしませんか？

声優ワークショップオーデイション

日時：12月12日(土)14時～16時
12月13日(日)10時～14時
12月14日(月)14時～16時
12月15日(火)10時～14時
12月16日(水)10時～14時
12月17日(木)10時～14時
12月18日(金)10時～14時
12月19日(土)10時～14時
12月20日(日)10時～14時
12月21日(月)10時～14時
12月22日(火)10時～14時
12月23日(水)10時～14時
12月24日(木)10時～14時
12月25日(金)10時～14時
12月26日(土)10時～14時
12月27日(日)10時～14時
12月28日(月)10時～14時
12月29日(火)10時～14時
12月30日(水)10時～14時
12月31日(木)10時～14時

会場：松山アーバンデザインセンター 公民学連携センター 1F 公民学連携センター

お問い合わせ：090-8777-1111

主催：松山アーバンデザインセンター、公民学連携センター、FM愛媛



4. アンケート結果

○声だけで演技するということが理解できました。イメージで声色が変わるといふことに、とても驚きました。声優目指して頑張っていきたいという気持ちがより強くなりました。本当にありがとうございました！

○これから先も言葉に関わっていくので、相手に気持ちを伝える仕方を学べたので良かったです。

○贅沢なことかもしれませんが、もう少し少ない人数で一人当たりの声を出す時間が多いと良いと思います。特に1回目は男性が出番多くてうらやましかったです(笑)。素敵な機会をありがとうございました！

○和式の発声方法のことを詳しく教えていただきたいと思いました。ぜひ次回以降に企画していただけたら嬉しいです。

○こういう機会をもうけてくださって本当にありがとうございました。とても有意義なワークショップでした。次回はもっと「もんだかな」(西予市民劇団)のメンバーにも受講してもらいますね！！

○知らない人たちがばかりで初めは緊張しましたが、今までつながることのなかった方々との交流会のようで楽しかったです。ありがとうございました。

○思いのほか参加者が多く、声優に対する興味が松山でも高く感じられた。ラジオドラマに留まらず、映像作品など幅広いジャンルで同じようなワークショップの開催を願います。

○まったくの素人が貴重な体験をさせていただき、感謝です。ありがとうございました。地元のラジオで電話でのレポートをしたり、歌の仲間との小芝居をする時など、今回の先生の話してくれたことを心に置いて精進していきたいな~と思っています！先

生~！楽しい時間をありがとうございました。

○すぐくためになりました。アドバイスを生かしてこれからの活動を頑張っていきたいです。ありがとうございました。

○私は人前で会話することがなかなか上手くできないが、今回森さんに、ゆっくりでいいから少しずつ頑張る経験を増やして欲しいと言ってもらい、非常に安心した。これからはなんとかやっっていけそうな気がした。

○日常生活にも役立つような、目からウロコのような事柄が多く、とてもためになりました。

○有意義でした。心がワクワクするワークショップでした。参加させていただき、心よりお礼申し上げます。

5. おわりに

最大の効果は、ネットワークの輪が広がったことである。互いにアドレスを交換し、連絡を取り合うことができるようになった。さらに、自分の声が電波に乗ることで大きな達成感を味わい、自分自身のスキルアップにもつながった。まちづくりへの参加意識も芽生え、UDCMを支えるメンバーとなり、UDCMの活動の幅もさらに広がっていくに違いない。

6. まちづくりの担い手育成

アーバンデザインスクールの実施

羽鳥 剛史 (副センター長)・片岡 由香 (ディレクター)

1. アーバンデザインスクールの実施概要

将来のまちづくりの担い手を育成するとともに、まちなかのファンを増やすことを目的として、平成26年11月より、まちづくりを実践的に学ぶ市民参加型の学習プログラム「アーバンデザインスクール」の推進・展開を図っている。

本スクールは、UDCMが母体となり、松山市都市再生協議会のメンバーである松山市内の4大学（愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学）の教員が運営委員会を組織し、活動を遂行している。コンセプトは、「学生から一般市民（社会人）まで、まちへの思いを持った幅広い世代が集い、参加者自らが柔軟な発想と方法でまちづくりを企画・実践する中で、まちづくりの進め方を学んでいく市民参加型・体験型の学習プログラム」である。参加者は、まちとの関わりや多様な人々との交流を深めつつ、まちづくりの企画からワークショップ、市民講座の運営を経て、まちづくり活動の実践に至るまでまちづくりに関わる一連のプロセスを体験し、その中で自ら成長していくと共に、まちの歴史や文化に根ざした松山市ならではの魅力的なまちづくり活動に結実させていくことを目指している。

今年度は25名（内4名は社会人）の生徒が隔週で集まり、松山市内のまちづくりの課題や楽しみ方について各自が発見をし、それらから各自でテーマを導き、大学関係者や行政、地元関係者との連携の下、松山市におけるまちづくり活動に取り組んだ。

2. アーバンデザインスクールの実施結果

スクール生らは、まち歩きや運営委員の講師らによるレクチャー、ワークショップ等に参加し、自分達が関心のある地域と、取り組みたい課題解決あるいは地域の魅力向上のテーマを発表し合い、学生と社会人の混合グループを形成した。その後、各グループでまちづくりを進めるための企画書を作成し、平成27年4月11

日には市民・行政職員・大学関係者参加のもと中間発表会を開催し、企画内容の公開プレゼンテーションを実施し、参加者から実現に向かうための助言を得た。その後、11月28日には、市民・行政関係者・大学関係者約70名と、野志克仁松山市長にもご出席いただき、アーバンデザインスクール第1期生が、最終的に実践に結実させた企画の内容、目的、プロセスなどについて、プレゼンテーションを行った。各プレゼンテーション後には、出席者から各チームに対して自由に質問や今後に向けてのアドバイスをして



表1 スクール生による企画テーマ（第1期生）

企画タイトル	チームの構成員	人数
これ、大街道総なめしてるってよ。～ぼっち・つれてってマップ～	愛媛大学教育学部（3回生）	4名
愛媛の「食」	松山大学経済学部（1, 2回生）	2名
椿のおもてなしプロジェクト	愛媛大学工学部（3, 4回生 各2名） 社会人3名	7名
さがせっ！道後の魅力プロジェクト	松山大学経営学部2回生, 3回生, 愛媛大学工学部3回生, 社会人	4名
走れ!!こども屋台電車	愛媛大学工学部3回生	5名
鉄道は浪漫だ!!～走れ!オリジナル鉄道部～	愛媛大学工学部3回生	1名
まちなかの手づくりプールで遊ぼう	愛媛大学工学部3回生	2名
次世代へ繋ぐ、ボクらの軌跡～アーバンデザインスクール活動記録～	松山大学経営学部3回生	1名
道後源泉クイズ&ウォーク	愛媛大学工学部3回生4名, 松山大学経営学部1名, 社会人1名	6名

いただいた。最終発表会の後には、スクール生の卒業式を行ったが、12名のスクール生(学生8名+市民4名)が、関わりの程度は様々ではあるが、そのまま2期生として継続を希望した。

3. 各グループの企画内容

スクール生による企画テーマは表1の通りである。

(1) これ、大街道総なめしてるってよ。～ぼっち・つれてってマップ～

本企画は、松山市の中心部である大街道周辺の飲食店で、お一人様(ぼっち)や友達同士・カップル(つれてって)におすすめのお店を紹介するグルメマップの発刊を目指したものである。写真は実際に完成した「ぼっちつれてってマップ」である。問題意識としては、一人で利用できる店や、複数人で利用するときシーン別でまとめられたグルメマップが充実していなかったこと、大街道周辺の違法駐輪が多いことの2点である。

そこでそれらの問題を解消するために、まず若者にアンケート調査を実施し、傾向を把握した。その後検討を重ね、マップに掲載する店舗の絞り込みをおこなった。本企画のメンバーがデザインを専攻していたことから、専門家のアドバイスを受けつつ、マップのすべてのデザインを自身達でおこなった。違法駐輪減少のために、駐輪場の位置もマップ内に掲載している。8000部のマップを発刊し、ビジネスホテルや病院、観光拠点にて配布した。

なお、愛媛県の平成27年度住民提案型商店街支援事業に採択され、各店舗への取材費や印刷費などは本事業の支援を受けた。



図 ぼっち・つれてってマップ

(2) 愛媛の『食』

本企画は、愛媛県内にある魅力的な店舗や食材を新聞やラジオを通じて県内外に発信していくことを目指したものである。ファストフード店やファミリーレストランに代表されるようなフランチャイズ形式の店舗では、地元の食材が活用できず地域経済にも寄与しにくく、地域の特色も失われていくのではないかという問題意識を持っている。そこで、地元店舗、地域食材の魅力を県内外に発信することを目的として、実際に地元店舗を取材し、取材内容を基に自分たちで新聞を作成し、松山アーバンデザインセンターが共同運営しているラジオ番組内でも情報発信をおこなった。ただ、店舗取材は1店舗にとどまり1度の新聞発行、1度のラジオ番組出演以降、活動の発展は見られなかった。

(3) 椿のおもてなしプロジェクト

本企画は「椿を松山・道後の新たなブランドにする」ことをコンセプトに、椿を道後の新たな観光の要素とし、落ち着いたお洒落なイメージを作ることを目指したものである。椿は松山市の花に制定されており、椿の香りに着目したまちづくり展開は全国的にもあまり例をみないことから、香りのブランド化を目指した。道後温泉旅館協同組合や河原ビューティー専門学校などと連携し、道後地区の足湯での香り演出や、椿油を使ったリラクゼーションや、バスソルト作成などの体験イベントを実施した。その後も道後温泉にて椿の香りのイベントを2度、松山空港でのイベントを1度と精力的に活動しており、今後の更なる展開が期待される。



写真 椿の足湯



写真 体験イベント



写真 湯玉っぷイベント

(4) さがせっ! 道後の魅力プロジェクト

本企画は、道後温泉本館改修工事による道後のにぎわいの衰退に問題意識をもち、道後温泉に依存しない新たな魅力の発掘、そして観光客への魅力のアピールを目指した。具体的な内容としては、松山市民を対象としたまち歩きイベントを行い、地域住民自身で道後の魅力を探してもらい、そこで得た魅力をマップ化するというものである。通常のガイドブックに掲載されている位置情報や歴史の紹介に加えて、その楽しみ方を住民の声で伝えているところがこだわりとなっている。2000部のマップを発刊し、道後温泉事務所や観光案内所、各旅館にて配布している。



写真 湯玉っぷ

(5) 走れ!! 子ども屋台電車

企画案は、松山市中心部を走行している路面電車に着目し、子供を対象としたイベントを企画するものであり、地元鉄道会社に対してプレゼンテーションを実施し、アドバイスをいただいたが、開催時期や安全上の問題から、実現には至らなかった。



写真 グループ作業

(6) 鉄道は浪漫だ!! ~走れ! オリジナル鉄道部~

企画案は、路面電車の軌道に全国からオリジナル車両を集め、コンテストを開催するという企画であり、地元鉄道会社に対してプレゼンテーションを実施し、アドバイスをいただいたが、開催時期や安全上の問題から、実現には至らなかった。

(7) まちなかの手づくりプールで遊ぼう

本企画は、子どもの外遊びの機会の減少に問題意識をもったものである。減少の要因として、事件の被害者となる危険性の高ま

りと公園内での様々な規制に着目した。それらを解消するために、子どもたちが安心して遊べる日常空間の創出と、地域の人々を巻き込むことを目的に、中心市街地のみんなの広場に手づくりのプールを作成した。保護者を含めると3日間のイベントで500人がみんなの広場を訪れ、にぎわいを創出したものの、目的達成にむけた更なる今後の活動が期待される。



写真 土嚢の設置



写真 土嚢プールで子どもたちが遊ぶ様子

(8) 次世代へ繋ぐ、ボクらの軌跡～アーバンデザインスクール活動記録～

本企画は、アーバンデザインスクールの活動の様子を発信し、市民にまちづくりについて興味をもってもらふことと、スクールの活動の足跡を残し蓄積させていくことを目指したものである。専門家のアドバイスを受けながら、ホームページを構築しスクールの様子や活動内容についてまとめ、2015年9月に運営を開始した。

(9) 道後源泉クイズ&ウォーク

本企画は地域住民や観光客に対して、道後の歴史や時代を知ってもらう機会を提供することで、道後への愛着の醸成を目指した。取り組んだ内容として、地域住民や観光客自身に道後の魅力を発見・発掘してもらうために「源泉クイズラリー」と「源泉ウォーキング」の2つのイベントを開催した。源泉や道後の歴史に関するクイズは、参加者に好評であった。



写真 源泉ウォーク

これらスクールでの活動はラジオ番組「まちラヂ」を活用して情報発信した。本ラジオ番組は、UDCMとFM愛媛が連携して、毎週水曜11:40～11:55に放送しているものである。この番組の中で、スクール生による企画案の紹介や、予定しているイベントの案内などを発信した。このような情報発信は、スクール生のモチベーションの維持あるいは向上にも繋がったと考えられる。

4. おわりに

本取り組みは、座学による市民講座などとは異なり、地域と連携しつつ活動を展開し、実際に自分達でもまちづくりに参加するという体験を通じた学びに意義があると考えられる。また、これらの取り組みは、UDCMの活動を展開していく上でも、地域連携を促進するという点で重要な役割を担うものである。

なお、12月4日よりアーバンデザインスクール2期生の活動が開始しており、今年度の1期生の活動成果を整理・分析し、今後の効果的なプログラムのあり方について考察を深めていきたい。

7-2. 保存修復工事の観光資源化の研究

松本 啓治 (シニアディレクター)

1. はじめに

道後温泉本館は、平成6年12月、公衆浴場として全国初となる重要文化財の指定を受け、その価値が全国に広く知られることとなった。しかしながら、昨年、道後温泉改築120年を迎えその老朽化が懸念されているところであり、松山市では平成13年3月「道後温泉本館総合診断」をおこない、平成18年3月「道後温泉本館保存修復計画」が答申された。その答申において「緊急的危険度は少ないが、今後永く維持・活用していくためには、大規模修復が必要である」と指摘されたところである。

平成23年3月11日の東日本大震災を教訓に、前回の調査から14年が経過していること、地震予測の見直しを行なうこと（6弱⇒6強）耐震技術の進展及び基礎診断実施要領の改訂が行なわれたことを踏まえ、今回、保存修復工事の計画を見直すこととなった。この見直しにあわせ、長期間かかる工事の経済的影響を減じる方が検討され、新・椿の湯の新築や椿の湯周辺の景観整備が実施されることとなった。本館の耐震化及び保存修復工事において、今回、希少な重要文化財の工事現場を商品化する方策について検討をおこなった。

2. 仮設工事の商品化の提案

本提案は、長期間に渡る工事の商品化の一方策として、松山出身の九州大学院生が全国学生卒業設計コンクールに提案し優秀賞を得たものである。



提案理由は、「保存修復工事はきわめて長期間となることから、まちに大きなダメージを与えると考えられる。そこでネガティブな要素をポジティブな要素に変えるため、保存修復という時期の希少性を楽しんだり、非日常の中に引き込まれたりするための装置が必要と考えた。保存修復をエンターティメント化して、保存修復やそれを見て楽しむ仮囲いそのものに価値を持たせる工夫をした」とのことである。

3. 本館敷地の情報

地域区分	市街化区域
用途地域	商業地域 (80/400)
防火地域・準防火地域	準防火地域
道路	東側・南側：県道 西側・北側：市道

4. 提案のメリットと問題点・課題

【メリット】

提案のメリットは優れた意匠性にあり、本館となじむ木材をスケール感のある木格子で本館全周に配置し、その利用者をも風景化しており、観光資源として十分通用するものと考えられる。

【問題点・課題】

- ① 提案は道後温泉本館が完全に閉館され、観光客等が本館内に出入りできなくなることを想定されたもので、部分的に営業しながら修復工事を行なうことを想定されたものではない。改修方法や営業方法が示されないと現実的な検討が難しい。
- ② 保存修復工事では素屋根と工事用足場、防塵ネットが設置されることが想定され、その外周に提案の見学施設が設置されることになるが、準防火地区に木造の見学施設の設置は難しい。
- ③ 周囲が市道と県道に囲まれた区域であり、交通制限に対し道

路法、道交法の許可や地元旅館協同組合等の理解が必要となる。

5. 他市の事例

【姫路市天空の白鷺】

姫路城の見学施設「天空の白鷺」は、平成22年1月から平成23年3月まで1年余りをかけて完成した。

(東西 47m、南北 47m、高さ 53m、8階建て)



素屋根構造は鉄骨造りであり素屋根内部に常設の見学施設「天空の白鷺」が設けられた。

これまで仮設構造物である素屋根内部に常設で見学施設が設置された例はなく、新たな法解釈として注目されている（文化財保護法の適用を受ける建築物は、建築基準法の適用除外とされており、同時に施工される仮設構造物も適用除外となる）。



工事エリアから見学室を望む

【一般的な保存修復における素屋根 知恩院】



保存修理工事の一般的な方法は、知恩院の修理工事のように本堂を素屋根で覆い、この素屋根内部を保存小屋、工作小屋、材料置場などに利用しようというものである。特に知恩院は国宝ということもあり、最も安全な工法を採用したとのことである。

【仁和寺丸太足場】



仁和寺の観音堂（重要文化財）保存修理工事は、京都府の伝統的工法である丸太足場で施工されている。府の中に30年の経験と実績を持つ専門家が配属されており、施工業者も専門業者の分離発注されている。構造計算ができないため、材料品質と実務経験に頼らざるを得ない工法である。

【清水寺丸太足場】

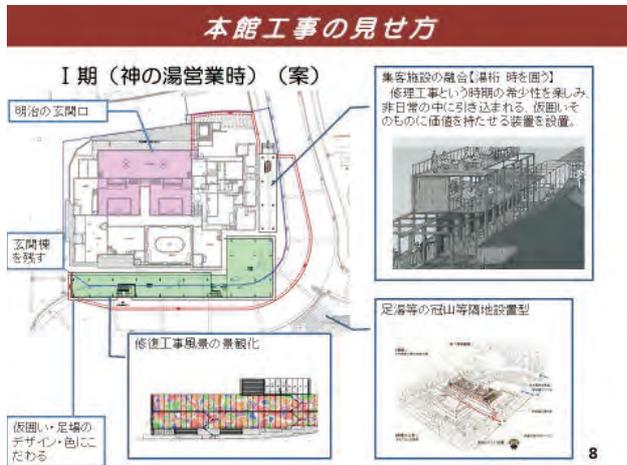


丸太足場は、文化財的な伝統工法として後世に伝えていかねばならない優れた工法である。柔軟性に富みどのような変化にも対応可能であるが、常に品質の良い丸太足場が確保されていなければならないこと、経験十分な技術者が必要なことから、道後温泉本館に採用できる工法ではないと思われる。

6. 本館工事の見せ方

本館工事の見せ方については、耐震化及び保存修復工事の工事

方法や交通規制の方法により左右されるが、優れた意匠性を持つ木足場の提案を部分的に採用すると共に鉄骨足場を使用する場合にあっても木質化する工夫が必要であろう。



建築基準法上は、①工事用の足場、②工事用の仮設建築物、③工事期間中の仮設建築物店舗のいずれかに位置付け、木造とすることが可能と考えられるが、これについては市建築指導課の判断を待たねばならない。

玄関棟は道後温泉の顔として極力残した形で工事を進めるなどの配慮や冠山に改修工事を展望できる休憩施設（足湯、ベンチ）を設置することなども必要であろう。

さらに、I期工事においては、神の湯棟（男湯）が男湯女湯に区分され部分営業される。入口は北側に変更の予定であるが、北側は明治27年開業の時の入口（一の湯、二の湯、三の湯）であり、120年前の入り口から入湯できるという希少性をPRすることや仮囲いのデザイン化、現在実施されているアートとのコラボなどのソフト事業との連動が不可欠であろう。

7-3. 若手経営者の生業とまち再生研究会

曲田 清維 (副センター長)

1. はじめに

「若手経営者の生業とまち再生研究会」はUDビジョン研究会の一環として、2015年の初夏に発足した。メンバーにはセンター員に加え、山口信夫先生（愛媛大学法文学部）や市職員も交えて作業や議論を重ねている。

銀天街周辺や三津浜地区には近年若手経営者による出店が顕現され、若者や中高年の来街者で賑わいが増えつつある。2つの地区は細街路で構成されるが、歴史性・地域性が異なり、若手経営者の出店動向もやや異なっている。両地区の聞き取り調査では、銀天街裏通りではひとり経営の服飾・飲食・美容等の店舗が出店し、経営者は市内・県内からの流入が多く、三津浜地区では、家族経営の雑貨・飲食の店舗で、県内・県外からの流入が多いことが分かった。今後は若手経営者の出店動向と展開を詳細把握してまち再生のあり方を検証していく。

2. まちなかの小さな変化—銀天街裏通りと三津浜地区

アーバンデザインセンター(UDCM)の周辺を見渡したとき、表通りである銀天街の店舗と周辺裏通りのそれとは随分と性格が違うことに気付く。表通りは華やかでありつつも、地元資本の店舗は着実に姿を消し、中央資本の店舗に変わられつつある。反対に裏通りを見ると小さな店舗ではあるが、周辺から移転してきた、或いは流入してきた若手経営者の店舗が多い。こうした現象は、郊外地区に目を移したとき、古い町である三津浜地区でも似たような店舗出店の現象に出会う。三津浜には数年前に横浜から進出してきた「ミツハマル」が拠を構え、空き店舗や空き家の紹介を始めており、それが大きな情報発信となっている。ミツハマル自身も古いまちとまちなみに魅力を感じて多彩な活動を繰り広げているということだ。

2つの地区における店舗出店の動機は少々異なりそうだが、路

地空間への出店ということから見ると幾つか共通のものがありそうだ。中心市街地に近接する銀天街裏通りと非震災郊外地区の三津浜という異なる性格を持つまちへの若手経営者の出店動向の比較を通して、まちなかの路地空間のあり方、まち再生の担い手としての若手経営者の意向、賑わい造りの可能性とそのあり方を探ろうということで作業が進んでいる。

3. 2つの地区を見ていく観点

まち再生の可能性を見つめながら、2つの地域を比較検討していく観点をいくつか掲げてみよう。「地域性・歴史性」の観点からは、銀天街裏通りは、中心市街地の震災復興地区で、小規模ビル群、細街路（路地裏）で構成され、一方、三津浜は、郊外港町の非震災地区であり、町家群、極細街路、といったキーワードが並ぶ。「経営者の属性」の観点からは、両者とも若手経営者が多いが、銀天街裏通りのひとり経営、業種としては服飾・飲食・美容等のお店、流入元は県内・市内、対して三津浜は家族経営、雑貨・陶器・飲食のお店、流入元は県内・県外といった見方ができる。「来街者」の観点からは、銀天街裏通りは若者中心（最近では中高年も）であり、三津浜地区は若者と中高年齢の訪問者が多い。まちが多様な人々を受け入れ、そのことが活性化の要因のひとつとするならば、路地・路地裏の変化の意味とその方向性を探ることは大切なことと思われる。今後は、上述の観点を踏まえながら、若手経営者に対する詳細調査等を実施し、まち再生の方向性を探っていく。



銀天街裏路地

三津浜の新しい店舗

7-4. 視察報告

曲田 清維 (副センター長)・松本 啓治 (シニアディレクター)

1. 金沢学生のまち市民交流館

訪問日：2015年12月11日

対応者：金沢市市民局市民協働推進課及び学生ボランティア

「金沢学生のまち市民交流館」は、大学が郊外部へ移転し、まちなかから学生の姿が消えていったため、彼らをまちなかへ呼び戻すとともに、一般市民と交流しながら、学都・金沢のまちの活性化を取り戻そうという試みである。その特徴は、①推進体制として、「金沢学生のまち推進会議」の下に、「金沢まちづくり学生会議」「学生のまち地域推進団体」を設け、大学、市民、行政の連携体制を明確にしていること、②学生及び市民活動を保証するために、「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」(平成22年3月・前文と5章22条からなる)を定め、行政・議会・高等教育機関・学生・市民等の共通理解を促していること、③交流拠点として「金沢学生のまち市民交流館」(大正期の大型町家・寄附施設)を設け、常駐の市職員と学生ボランティアで管理運営していること、等である。

UDCMのみならずアーバンデザインスクールにとっては示唆に富むものであり、同行のアーバンデザインスクール生の愛媛大学生にとっても貴重な交流機会となった。



金沢交流館の和室での応対 (金沢市)

2. 佐賀市まちなか再生社会実験「わいわい!!コンテナ」

訪問日：2016年1月27日

対応者：「NPO法人まちづくり機構ユマニテさが」ほか

「わいわい!!コンテナ」プロジェクトは、佐賀市中心市街地の活性化を目的に、「佐賀市まちなか再生計画」(平成22年策定)に基づく実践プログラムを、市民とともにその有効性を体感しながら推進して行くための社会実験である。その内容は、①まちなかの「憩いの場」づくり、②駐輪場整備によるアクセス向上、③フレキシブルに使える広場、④人と人、人とまちをつなぐ情報発信基地、を目指したものである。「わいわい!!コンテナ」は原っぱや広場を「空き地リビング」として位置づけ、コンテナその他で親しみやすい空間整備を行ったもので、既にコンテナ2まで進展している。

訪れた日は冬の平日にも関わらず賑わいを見せ、また仕事場に見えるコンテナは楽しさと存在感に溢れており、活性化の起爆剤になりつつあるという兆しが見て取れた。

3. UDCIC (アイランドシティ・アーバンデザインセンター、福岡市東区照葉)

訪問日：2016年1月27日

対応者：UDCIC副センター長

UDCICは、福岡市の先進的なモデル都市であるアイランドシティのまちづくりを進めるため、「アーバンデザインシティ・アーバンデザイン協議会」の下に、公・民・学連携のまちづくり拠点として開設された(九州大学スタッフが中心となって活動、センター長は坂井猛九州大学教授)。公民学連携活動の4つの柱は、①まちづくり活動、②まちのデザインの研究・提案、③大学・企業による調査研究等、④情報発信・プロモーション、であり、「洗練されたアジアのモデルとなる都市づくりを目指す」というもの。

ただ、支援・関与する行政としては港湾部局が中心であり、行政全般の理解を得られているか、若干不明確であった。



わいわい!! コンテナ2 (佐賀市)



UDCICエントランス (福岡市)

4. 金沢・加賀温泉郷視察報告

(1) 金沢市

金沢市は、人口46.5万人、面積469km²、1996年中核市に指定された。金沢市の原型は、1853年、前田利家による城下町の建設である。関ヶ原の戦いを経て、加賀藩は120万石の大藩となり、17世紀後半には、現在の中心市街地が形成されている。

以来、今日まで戦火や大きな災害に見舞われることがなかったため、歴史的な町並みや用水路などがいたるところに残されており、昭和39年、「武家屋敷群地区の土塀・門などの修復制度」が制定され、伝統的な町並みの保存活動がスタートしている。平成6年には「金沢市こまちなみ保存条例」が制定され、平成13年には文化財保護法に基づく「伝統的建造物群保存地区」の指定を受け、町並み整備が深化し全国有数の歴史的な町並みが残るまちとして広く認知されている。

写真は、東山ひがし伝統的建造物群保存地区である。保存地区内の建築物は144戸でこのうちの約60%が伝統的な茶屋建築である。弁柄塗りの細かい出格子が特徴、舗装は御影石貼りで落ち着いたたたずまいとなっている。

こうした町並みを整えていくために、金沢市は実に手厚い支援を行っている。建築物の外観には80%、上限1,500万円、工作物の修理には80%、その他様々な補助メニューを用意している。空調機を格子で隠したり、地上機器を植栽で隠したり、駐車場も板塀で見えにくくするなど、道後温泉地区でも参考となる手法が多い。



(2) 加賀温泉郷 (山代温泉・山中温泉)

石川県の温泉といえば山代・山中・片山津がその代表である。山代温泉は、1300年の歴史を持つ北陸随一の古湯で、行基が霊峰白山へ修行に向かう途中、傷口を湧水で癒すカラスを見つけたことにより、温泉が発見されたという伝承がある。

山代温泉には2つの公衆浴場「総湯」と「古総湯」があり、古総湯は明治時代の建物を復元したもので、総湯は新しく建築された共同浴場である。この温泉再生に長年関わってきたのが内藤廣氏と南雲勝志氏で、道後温泉でもなじみのある建築家とデザイナーである。「湯の曲(か)輪(わ)」(周囲の町並み)の歴史に想いを馳せ、ゆったりとした時間を過ごす癒しの空間となっている。



車道・歩道とも自然石張で質感のある照明柱やポラード、柳が配置され、山代温泉の湯の曲(か)輪(わ)の景観を創りだしている。また、近接して魯山人寓居跡「いろは草庵」が整備され、文人墨客に愛された歴史をシンボライズ化している。平成21年4月「山代温泉湯曲輪景観整備地区」に指定され、地元ホテル・商店一体となって景観に配慮したまちづくりを進めている。

山中温泉は、傷を負った白鷺が傷を癒しているのを見て温泉を発見したとの伝承が伝えられている1300年の歴史を持つ温泉である。深山に囲まれた自然豊かな温泉地で、大聖寺川の溪谷沿いに旅館・ホテルが立ち並んでいる。数多くの文人墨客が訪れ、松尾芭蕉が8泊したことは有名である。

山中町では平成6年景観条例を制定し景観まちづくりに取り組

み、現在、「南町」「湯の出町」「湯の本町」の景観整備地区を指定し、高さや階数、色彩、門扉、目隠しなどの景観形成基準を設け、景観の質的向上を目指している。





金沢市では北陸新幹線の開通で約80%増の観光客が押し寄せている施設が多い。景観整備が行なわれた東山ひがし茶屋街や主計町などには、多くの観光客が訪れている。山代温泉総湯利用者は整備前後で36万人から63万人へと約75%も増加し、山中温泉では、整備により観光客が48万人（H16）から59万人（H18）へと11万人（約23%）増加した。整備による経済効果も見られ、景観を整えるメリットは大きい。道後地区の景観をいかに魅力的に整えていくか、本館改修を控え松山の力量が試される。

8. 情報発信

片岡 由香 (ディレクター)

1. はじめに

市民のみなさんにUDCMの取り組みや、松山のまちの魅力、まちづくり活動をしている人たちを知ってもらうために、ラジオ、HP、SNSなどを活用して情報発信を行っている。

2. えひめまるごと15分「まちラヂ」

2015年4月からFMラジオ(JO-EUFM愛媛) えひめまるごと15分「まちラヂ」において、UDCMの活動や松山のまちづくりに関する情報発信を開始した。

「えひめまるごと15分」とは、愛媛県内の市町を様々な角度から紹介する情報番組で、愛媛県内の市町の祭り・催し物、観光情報、名所旧跡、各土地に伝わる言い伝え、店や施設などのおすすめスポット、産業紹介、その道の達人、おらが町の自慢などを紹介する15分番組である(参考: FM愛媛公式HP)。UDCMでは、このFM愛媛「えひめまるごと15分」の毎週水曜11:40~11:55の放送枠で「まちラヂ」という番組を担当し、UDCMの取り組みだけでなく、市民持ち込みのまち情報、松山や愛媛で活躍している人の紹介など、松山のまちやまちづくりにまつわる情報発信を行った。また、「まちなか情報」のコーナーでは、松山で開催予定

のイベント情報等を紹介した。

FM放送は愛媛県内のみでの放送であるため、より多くの人に聞いていただけるよう放送後の音源データをYoutubeにアップした。

3. HP、SNSの運営

公式HPを開設して、UDCMが関わっているプロジェクト紹介を行うことでUDCMの取り組み内容の周知に努めるとともに、イベントの告知・報告を行うことで、みんなのひろばやもぶるテラスで開催されるイベント参加者の増加を促した。

また、UDCMの公式Facebookページを2015年2月10日に公開し、HP更新のお知らせ、イベント告知・報告、UDCMの日々の様子、まちラヂ放送の告知、まちラヂyoutube動画公開のお知らせ等の情報を発信した。FacebookとTwitterを連動させることで幅広い層が情報にアクセスできるようにした。



収録風景

9. おわりに

松山アーバンデザインセンター（UDCM）の活動は、湊町の拠点開設から数えると1年半が経った。センターの恣越しに見える「みんなのひろば」は、保育園の子どもたちや車いすの高齢者、若い学生たちで、結構な賑わいである。中心商店街の真ん中付近にあって、少しだけ異空間で、またさわやかな場所となっており、まちなかの変化が見て取れる。

「公民学」の連携を旗印に、大きな期待を背負って出発したUDCMの活動は、助走期を経てその形が徐々に増えてきたと思われる。まちづくりの定番である「もの」「こと」「ひと」の角度から見ていこう。

「ものづくり」における大きな変化は、一番町交差点大街道入り口の改変である。アーバンデザインセンターの初仕事である入り口周辺のデザインマネジメントは功を奏し、アエル松山のオープンと両輪になって商店街の賑わいを取り戻しつつある。道後温泉地区の活性化、花園町通りの改修計画や郊外拠点地区としての三津浜地区の景観まちづくりなど、センターの関わる領域は着実に広がってきた。

「ことづくり」については企画が目白押しであった。道後鉄道120周年を記念した鉄道ウォークには大勢の市民が参加し楽しんだ。まちの歴史を辿るのに切り口鮮やかな企画と言える。また子規や漱石にまつわる講演やラジオ番組も盛況で、俳句や文学のまちづくりとしての「ことおこし」へとつながっている。そのほか、みんなの広場を舞台にした土囊プールなど、交流拠点としてのまちの賑わいづくりも着実に進んだ。

「ひとづくり（ひとそだて）」はアーバンデザインスクールを核に成果が著しい。開設当初から始まったスクール生（1期生）の活動は、幾つかのインパクトをまき起こした。ひとつは若い学生達の姿が町なかに見え始め、明るい賑わいが芽生えていること、2つに4大学の連携・協力が功を奏し教員間のつながりができ始めていること、3つに大学生に加え社会人の参加も得て、交流の基盤づくりへと進展していること、4つに椿の香りプロジェクトな

曲田 清維（副センター長）

どの具体的成果が着実に生まれていること、などである。単なる学習の枠を超えて現在のそして将来のまちづくりを担う「アーバンリスト」が育ち始めている。

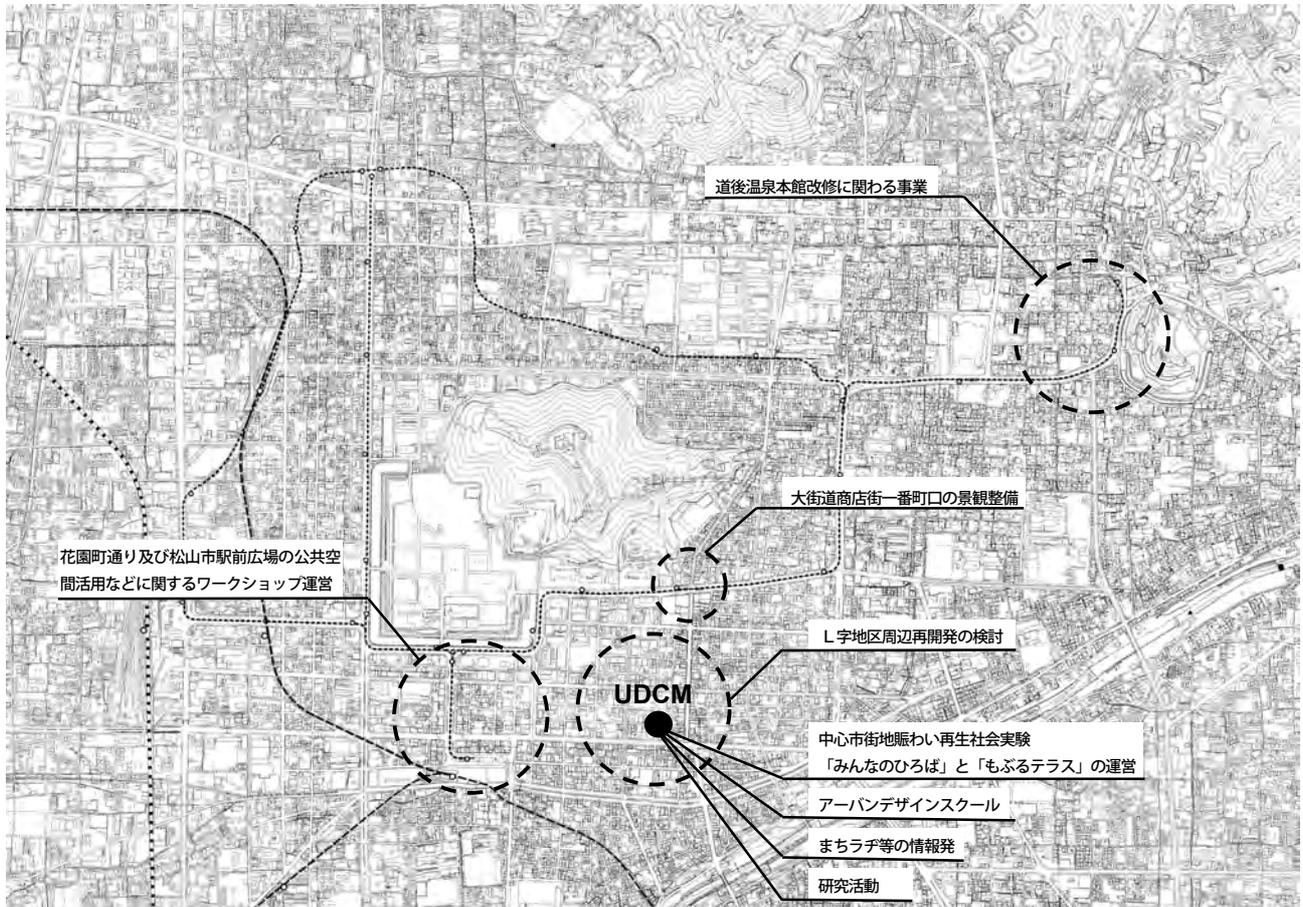
こうした「ものづくり」「ことづくり」「ひとづくり」のいずれもセンター独自では進めることは不可能で、公としての行政やNPO等の機関、そして民間、大学の連携協力を密接に進めねばならない。

年明け2月に、この1年半を振り返ったシンポジウム「松山アーバンデザインセンターの役割と今後の展望」（於：坂の上の雲ミュージアム）では、副市長も加わり上述の成果について熱心に議論され、公民学の連携を基盤にしたUDCMの活動総括と展望を確認するという貴重な機会となった。さらに、発足からは3年度目を迎えるにあたってUDCMの紹介パンフレットが刷新された。そこにはUDCMの4つの役割として「交わる、知る、創る、学ぶ」のキーワードが並んでいる。「交わる」は子どもからお年寄りまでみんなが集う、「知る」は情報を得、発信する、「創る」は地域をデザインする、「学ぶ」はまちづくりの担い手育て、を目標としている。UDCMの活動が明示されるとともに、内外に向かってより広く発信できればありがたい。

UDCMへの期待は大きく、それは松山市とその都市圏が抱える課題が多くかつ喫緊のものばかりであるということにほかならない。一方、UDCMの認知度は必ずしも高くはなく、また交流拠点としてはともかくも、まちづくりに関わる人々やNPO等との連携もこれからである。課題を克服しつつ、少しでも前進したいと願っている。

さて、4月から片岡由香ディレクターが愛媛大学社会共創学部へ転出する。センター立ち上げから縦横無尽の活躍で業務を引っ張って頂いたことに深謝したい。今後もディレクターとしてセンターの仕事に応援頂くことになっており、これまで同様の仕事仲間としてお付き合い頂ければ幸いである。

主な活動フィールド



発表論文

1. 片岡由香, 新階寛恭, 松本啓治, 羽藤英二: 公学民協働による都市空間形成に関する研究 —松山アーバンデザインセンターの取組みを事例として—: 日本都市計画学会中国四国支部: 都市計画研究講演集13: pp.13-14: 2015.4.
2. 片岡由香, 羽鳥剛史, 羽藤英二: 松山アーバンデザインセンターの設立とその役割: 土木計画学講演集: 2015.6.
3. 片岡由香, 羽鳥剛史, 河内俊樹, 直井玲子: まちづくり実践学習プログラムの意義と課題-松山アーバンデザインスクールの取組み-. 地域デザイン学会 第4回全国大会, 横浜商科大学: 2015.9.5.
4. 片岡由香, 羽鳥剛史, 羽藤英二: アーバンデザインの展開におけるまちづくり実践学習プログラムの可能性-アーバンデザインスクールの取組みを事例に-. 土木計画学研究・講演集, Vol. 52, CD-ROM. 秋田大学: 2015.11.22.

スタッフ

羽藤 英二

センター長
東京大学大学院工学系研究科 教授

曲田 清維*

副センター長
愛媛大学アーバンデザイン研究部門長 教授

羽鳥 剛史

副センター長
愛媛大学大学院理工学研究科 准教授

松本 啓治*

シニアディレクター
愛媛大学アーバンデザイン研究部門 教授

片岡 由香*

ディレクター
愛媛大学アーバンデザイン研究部門 助教

吉井 稔雄

プロジェクトアドバイザー
愛媛大学大学院理工学研究科 教授

松村 暢彦

プロジェクトアドバイザー
愛媛大学大学院理工学研究科 教授

千代田 憲子

プロジェクトアドバイザー
愛媛大学教育学部 教授

泉谷 昇

プロジェクトアドバイザー
NPO法人いよココロザシ大学 主宰

河内 俊樹

アーバンデザインスクール運営者
松山大学経営学部 准教授

畔地 利枝

アーバンデザインスクール運営者
聖カタリナ大学人間健康福祉学部 教授

直井 玲子

アーバンデザインスクール運営者
松山東雲女子大学人文科学部 講師

石飛 直彦

客員研究員
復建調査設計(株)松山支店技術課長

大野 利恵*

事務職員
愛媛大学アーバンデザイン研究部門 研究補助員

*コアスタッフ

学生スタッフ等

柴田 典子, 青木 綾香, 井上 咲, 井上 真理, 尾形 愛実,
佐川 奈緒, 塩崎 真世, 田岡 沙耶, 谷 誠時, 本郷 里沙,
宮崎 千夏, 毛利 彩希, 矢野 凌佑

2015	活動	アーバンデザインスクール
4月	4.9 第5回社会実験運営委員会 (UDCM) 4.25 (一社) 日本計画行政学会研修会 (UDCM)	4.3 第11回 まちづくり企画実践 4.11 第12回 中間発表 4.17 第13回 まちづくり企画実践
5月	5.11 南海ラジオ「これかラジ人」収録	5.1 第14回 まちづくり企画実践 5.15 第15回 まちづくり企画実践 5.29 第16回 まちづくり企画実践
6月	6.5 芝浦工業大学前田英寿氏 UDCM 視察 6.6 愛媛県技術士会講演 6.8 三津浜地区景観まちづくり研究会 (第3回) 6.9 道後温泉懇談会 6.25 坂の上の雲ミュージアム指定管理者プロポーザル	6.12 第17回 まちづくり企画実践 6.26 第18回 まちづくり企画実践
7月	7.3 草津市 UDCM 視察 7.11 テレビ愛媛 UDCM 取材 7.14 道後温泉活性化フォーラム (愛媛大学 南加ホール) 7.16 広島市 UDCM 視察 7.22 花園町 WS 7.22 お城下まつやま文化観光委員会 7.24 アーバンデザイン研究会 (川崎京大教授:UDCM) 7.25 花園町 WS 7.28 松山市美しい街並みと賑わい創出事業補助金審査委員会 7.29 青年会議所連携会議 7.30 三津浜地区景観まちづくり研究会 (第4回)	
8月	8.5 草津市 UDCM 視察 8.10 第9回社会実験運営委員会 (UDCM) 8.22 道後温泉120周年記念ウォーク 8.25 L字地区再開発事業選定審査委員会 8.26 お城下まつやま文化観光委員会 8.30 花園町 WS	8.1-2 香る花絵馬と足湯 (道後温泉夏まつり 2015OP イベント) 8.21-23 「まちなかの手づくりプールで遊ぼう」の実施
9月	9.6 京都市知恩院視察 9.9 第10回社会実験運営委員会 (UDCM) 9.15 福井大学 UDCM 視察 9.16 お城下まつやま文化観光委員会 (写真班) 9.27 京都府宇治市視察 9.28 姫路市視察 9.29 京都市清水寺視察	10.3-4 道後でのまち歩きイベントの実施 9月中旬 アーバンデザインスクールの取り組みの情報発信を実施
10月	10.1 花園町通り戦略会議 10.3 漱石と子規 愚陀仏庵シンポジウム協議会 10.10 花園町通り WS 10.22 IBM、UDCM 視察 (UDC 立ち上げ準備) 10.24 四国地区青年技術士会講演 10.27 L字地区再開発検討委員会打合せ (RIA、デザイン課) 10.28 お城下まつやま文化観光委員会	10.1-4 椿の香りでおもてなし in 道後温泉 10.3-4 道後でのまち歩きイベントの実施 10月中旬 松山市ならではの飲食店等の情報発信
11月	11.5 お城下まつやま文官観光委員会 (愛称ロード班) 11.7 漱石が見た「坊ちゃんの」のまち探訪 (松山子規記念博物館) 11.8 シンポジウム「漱石と子規 愚陀仏庵」(松山子規記念博物館) 11.12 第1回銀天街L字地区再開発検討専門部会 (委員長として出席) 11.14 都市計画学会中四国支部シンポジウムー公民学の連携のまちづくりを考える (UDCM) 11.18 第6回松山市都市再生協議会 11.22 愛媛大学 COC 公開講座 in 松山市「三津の魅力が生業を呼ぶー企業、市民、行政によるまちづくりー」	11.27-29 椿の香りでおもてなし in 道後温泉 第二弾 11.28 最終活動報告会
12月	12.10-12 金沢学生のまち市民交流館の視察 12.12 声優 WS 12.13 声優 WS	12.4 第1回 ガイドانس 12.18 第2回 まちづくりワークショップ
2016		
1月	1.9 声優 WS 1.10 声優 WS 1.14 草津市商工会議所 UDCM 視察 1.16 道後鉄道120周年記念ウォーク 第2弾 1.18 声優 WS 1.21 高齢者大学講演 1.23 声優 WS 1.24 声優 WS 1.26-28 佐賀「わいわい!! コンテナ」及び福岡 UDCIC の視察 1.30 ラジオ音楽ドラマ収録 1.31 ラジオ音楽ドラマ収録	1.9 第3回 まち歩き 1.15 第4回 まち歩きの成果発表 1.16 朝大学テレビ「あなたも“だんだん”好きになる! ぶらり松山2016」ロケ 1.29 第5回 まちづくりレクチャー
2月	2.3 道後温泉審議会 2.4 第2回銀天街L字地区再開発検討専門部会 (委員長として出席) 2.8 デザインマネージメント WS (UDCM) 2.8 第4回松山駅周辺笑顔あふれるまちづくり推進協議会 (委員長として出席) 2.10 市駅前 WS 2.12 第4回アーバンデザイン研究会+第2回アーバンビジョン研究会 (西村、浅子、片岡) 2.16 道後景観まちづくり勉強会 2.18 香川大学 (西成教授) UDCM 視察 2.20 松山アーバンデザインセンター・みんなのひろばフォーラム「アーバンデザインセンターの役割と今後の展望」 2.27 道後温泉活性化懇談会	2.8 椿の香りでおもてなし in 椿の湯 2.12 第6回 まちづくりレクチャー 2.26 第7回 まちづく事例の自主調査
3月	3.1 道後景観勉強会 3.3 関西大学 UDCM 視察 3.9 札幌市立大学 UDCM 視察 3.10 都市景観賞調査立会 3.10 消費者アンケート調査結果報告 3.12 三津浜景観まちあるき 3.22 第7回都市再生協議会	3.11 第7回 まちづく事例の自主調査発表① 3.19-21 椿の香りでおもてなし in 松山空港 3.25 第8回 まちづく事例の自主調査発表②

一期生

二期生

みんなのひろば・もぶるテラスでのイベント		「まち@ラヂ」放送内容		講演・研究活動	
4.11	第2回交流会 (M's Bar) ～アーバンデザインスクール参加者と松山のまちなかについて語る～ (もぶるテラス)	4.1 4.8 4.15 4.22 4.29	松山アーバンデザインセンターおよびその役割について 松山アーバンデザインスクールについて みんなのひろばについて みんなのひろばでインタビュー アーバンデザインスクール「椿の香りでおもてなし」プロジェクトについて		
5.12	みんなの広場壁画ワークショップ (UDCM)	5.6 5.13 5.20 5.27	アーバンデザインスクール「これ、大街道総なめしてるってよ。～ぼっち・つれてってマップ～」プロジェクト 松山アーバンデザインセンターの「歴史・文化を活かしたまちづくり研究会」 松山アーバンデザインセンターの学生スタッフにインタビュー アーバンデザインスクール「道後のにぎわいをいつまでも 歩いて見つけるまちの魅力」プロジェクト	5.12 5.26	歴史文化研究会 歴史文化研究会
6.20 6.27 6.29-7.12	土曜夜市に合わせた納涼スペースイベント part1(みんなのひろば) シャボン玉作りイベント ※雨天につき中止 (みんなのひろば) 松山のまちなか振り返り展 (もぶるテラス)	6.3 6.10 6.17 6.24	「アーバンデザイン」ってなに？ 「フィールドミュージアム構想」によってまちでどんな変化・影響があったのか まちづくりのキーマン！ アーバンデザインよもやま話	6.2 6.6 6.16 6.24 6.30	歴史文化研究会 愛媛県技術士会講演 歴史文化研究会 若手経営者生業研究会 歴史文化研究会
7.4 7.11 7.18 7.25 7.28 7.31-8.1	セタワークショップ、アカペラ LIVE (もぶるテラス・みんなのひろば) 絵本読み聞かせイベント (ココサンとコラボイベント) (もぶるテラス) 土曜夜市に合わせた納涼スペースイベント part2 (みんなのひろば) 土曜夜市に合わせた納涼スペースイベント part3 (みんなのひろば) 科学教室 (みんなのひろば) エフ/99 納涼落語会 (もぶるテラス)	7.15 7.22 7.29	アーバンデザインスクール「椿の香りでおもてなし」プロジェクトについて UDSM「手作りプールで遊ぼう」イベントについて 道後温泉活性化フォーラムについて①	7.2 7.7 7.14 7.28 7.29	UDビジョン研究会 歴史文化研究会 歴史文化研究会 歴史文化研究会 若手経営者生業研究会
8.1 8.7 8.19 8.19	土曜夜市に合わせた納涼スペースイベント part3 (みんなのひろば) お化け屋敷 (みんなのひろば) みんなの広場・土囊プール (みんなのひろば) 第3回交流会 (M's Bar) 身近なまちなか・まちづくりについて語りませんか？ (もぶるテラス)	8.5 8.12 8.19 8.26	道後温泉活性化フォーラムについて② アーバンデザインスクール「手作りプールで遊ぼう」イベント企画の告知 おばけ屋敷イベントについて アーバンデザインスクール「手作りプールで遊ぼう」イベント報告	8.4 8.11 8.19	歴史文化研究会 歴史文化研究会 若手経営者生業研究会
9.21-23 9.26	「なつかし遊び商店街 in お城下」との連携 (もぶるテラス) 第0回ひろばのはたけ (みんなのひろば)	9.2 9.9 9.16 9.23 9.30	道後温泉なつまつり 2015 香る花絵馬と足湯イベント アーバンデザインスクールの取り組みについて～愛媛の食～ UDCM 学生スタッフの取り組みについて～ご近所紹介マップ～ 松山アーバンデザインスクール「歩いてみつける道後の魅力プロジェクト」について UDCM 学生スタッフの取り組みについて～ひろばのはたけ～	9.30	若手経営者生業研究会
10.18 10.30 10.31	第1回ひろばのはたけ (みんなのひろば) プロジェクト展示 (もぶるテラス) ハロウィンイベント～空き箱などを使った手作りリメイクワークショップ～ (もぶるテラス)	10.7 10.14 10.21 10.28	松山への移住と新しい生き方について他① 松山への移住と新しい生き方について他② NPO 法人 SHARE LIFE DESIGN について share life design 山本さんシェアハウスについて	10.20 10.21 10.22 10.30	歴史文化研究会 若手経営者生業研究会 四国地区青年技術士会講演 「松山アーバンデザインセンターの取組み」関西大学 団地再編プロジェクト
11.7 11.20	第2回ひろばのはたけ (みんなのひろば) もぶるテラスでの pop up library の開始	11.04 11.11 11.18 11.25	ロープウェー街の整備について 花園町リノベーションプロジェクトについて 留学生支援、防災士の資格について pop up library について	11.14 11.22 11.25	「公民学連携のまちづくりを考える」日本都市計画学会中国四国支部 「三津の魅力が生業を呼ぶ」愛媛大学 COC 公開講座 in 松山 若手経営者生業研究会
12.13 12.18 12.19 12.20 12.23	第3回ひろばのはたけ (みんなのひろば) クリスマス企画ひろばの音楽～ゴスペル～ (みんなのひろば) クリスマス企画ひろばの音楽～弾き語り～ (みんなのひろば) クリスマス企画ひろばの音楽～松山東雲中高ハンドベル部～ (みんなのひろば) ココ・サンお話し会 / パルーンアートづくり / 松ぼっくりツリーをつくらう (もぶるテラス)	12.2 12.9 12.16 12.23 12.30	椿の香りでおもてなしプロジェクト第3弾について UDCM クリスマス企画について 道後鉄道 120 周年記念ウォークについて ラジオドラマ「架空のまち」プロジェクトについて 高齢者のサポートと、留学生のサポートについて	12.25	歴史文化研究会
1.13	「みんなのひろば・もぶるテラス」のあり方を考えるワークショップ (もぶるテラス)	1.6 1.13 1.20 1.27	道後シェアハウスの新しい取り組みについて (BAZZ HOUSE) シェアカフェについて 中島の島暮らしについて 歴史勉強会について	1.12 1.21	「景観デザインの考え方について」道後温泉椿の湯周辺ファサード整備勉強会 高齢者大学講演
2.9	第4回交流回 (M's Bar) 身近な賑わいづくり・まちづくりについて語りませんか？ (もぶるテラス)	2.3 2.10 2.17 2.24	NPO 法人農音の活動について、その他 中島の空き家対策について 松山市内の空き家対策 (中古物件のリノベーション) 声優ワークショップについて	2.8 2.9 2.10 2.22	「UDCMの1年を振り返って」UDCM デザインマネジメント WS 歴史文化研究会 駅前ワークショップ講演「駅前広場とシビックプライド」 若手経営者生業研究会
		3.2 3.9 3.16 3.23 3.30	マツヤマンプロジェクトについて 2/20 に行われたフォーラムの報告 「マツアップ」という新しいプロジェクトについて 今年1年のUDCM および、みんなの広場を振り返る 今年一年のUDCM 及びまちラヂを振り返る	3.14	「地方都市から学ぶ小さく強いまちの育て方」都市デザイン環境会議関西ブロック 第2回都市環境デザインセミナー



松山アーバンデザインセンター
Urban Design Center Matsuyama

平成28年3月31日発行
〒790-0012
愛媛県松山市湊町3丁目7番地12
Tel 089-968-2920
Email udcm.matsuyama@gmail.com
HP <http://udcm.jp/>